Selbstentblößungsrituale

Irmela Hijiya-Kirschnereit

私小説（ししょうせつ）
自己暴露の儀式

1992年4月20日　初版第1刷発行

著　者　イルメラ・日地谷（ひじや）＝キルシュネライト
訳　者　三島憲一・山本尤
　　鈴木直・相澤啓一
発行者　下中　弘
発行所　株式会社　平凡社
　　東京都千代田区三番町5番地
　　郵便番号 102　振替東京 8-29639
　　電話　東京（03）3265-0471〔編集〕
　　（03）3265-0455〔営業〕
印　　刷　東洋印刷株式会社
製　　本　和田製本工業株式会社

ISBN 4-582-33305-2
NDC分類番号910.26　四六判（19.4cm）　総ページ584

乱丁・落丁本のお取替えは直接読者サービス係までお送り下さい
（送料は小社で負担します）

Selbstentblößungsrituale

私小説

自己暴露の儀式

Irmela Hijiya-Kirschnereit
イルメラ・日地谷＝キルシュネライト
三島憲一＋山本尤＋鈴木直＋相澤啓一＝訳

平凡社

FÜR
MUZZI
UND
AUALA

Irmela Hijiya-Kirschnereit
Selbstentblößungsrituale
Zur Theorie und Geschichte
der autobiographischen Gattung „Shishōsetsu"
in der modernen japanischen Literatur
Copyright ©1981 by Franz Steiner Verlag GmbH, Wiesbaden

Japanese translation rights arranged with
Franz Steiner Verlag GmbH
through Tuttle Mori Agency, Inc., Tokyo

Japanese edition ©1992 by Heibonsha Ltd., Publishers,
Tokyo

Printed and bound in Japan

日本語版への序文

なぜ私小説なのか。一九七〇年代の半ばにこのテーマに関わり始めたころ、私の関心が、私小説という近代日本文学のこの重要な散文ジャンルにあったことはさりながら、他方では、このジャンルを手がかりにして、文学に対する日本人の関わり方、日本の読者にとっての文学の役割、また作家にとってのそれ、ひいては日本社会全体にとっての文学の役割について何か知ることができるのではないだろうかという思いもあった。

しかし、そのころはまた、戦後初期（一九四〇年代後半および一九五〇年代初頭）に私小説が批判の十字砲火を浴びた時代の後遺症がまだ響いている時期であった。その結果として、文学研究において私小説が対象として取り上げられることはまれで、論文その他の材料も散見されるといった程度であった。当時私が書物のかたちで知っていた唯一の文献は山本健吉の『私小説作家論』（初版一九四三年、改訂版一九六六年）であり、それといえども、私小説ジャンルそのものを対象にしているわけではなく、個々の作家を扱っているにすぎなかった。いまひとつの研究書である西田正好の『私小説再発見』（一九七三）を手にしたのは、一九

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

七九年に本書を脱稿し、一九八一年にドイツで刊行されてからだいぶたった最近のことである。[*1] だがこれは、研究史とも関係のあることで、私小説研究は一九七〇年代以降、驚くべき速さで変化している。私小説というテーマに対する関心は上昇しつつあるように思われる。それは、作家の側にも、読者の側にも――この両者の間に関連があることは、つねに前提とされねばならない――共通して見られるし、それと並行して、文学研究においても関心の増大が見られる。このところ、それ以前の五十年間に出たよりも多くのモノグラフィが著わされている。こうした変化がどうして生じたのか、その理由について考察する前に、この新たな傾向を概観しておこう。

一九七〇年代後半から八〇年代にかけての時期、たとえば『文芸年鑑』に掲載されている文学展望などを注意深く読むと、私小説が一種の判定基準として機能することが増えているのに気づく。ある作品が私小説であるかないかという問いは、驚くべきことに、ますます重要な尺度になりつつある。特に注目すべきは、私小説に近いということが、以前のようには自動的に否定的要素として評価されることがなくなっていることである。[*2] その際、私小説とか私小説的な書き方といった言い方で何が意味されているのかは、それほど明確ではない。その点で、津島佑子の『光の領分』は、私小説ではないが「きわめて私小説的」[*3]であるとか、一九七一年の直木賞受賞作、豊田穣の『長良川』は、「私小説ではない私小説的な私小説」[*4]といった奇妙な評言も見られることになる。おもだった批評家たちの議論においても、私小説というテーマは一九八〇年代初頭以降、ますます大きな場を占めてきている。[*5] 文芸批評家の座談会のひとつで、上田三四二が、「私小説」という言葉を彼の書く文芸時評でまったく用いない理由として、「作られている作品が

ほとんどといっていいくらい私小説的であるからなんですね」[*6]と述べていることも、そうした事態をよく示している。こうした極端な見方のなかでは、私小説と純文学とはほとんど同じものになっている。

もちろんのこと、私小説に対してきわめて厳しい態度をとる文学研究者が依然としていることも、間違いない。篠田一士がそのひとりであり、彼の『日本の現代小説』（一九八〇）は、私小説に対する批判的言辞に満ち満ちている。篠田は美的な理由、たとえば、構造化が足りないことなどのゆえに、私小説を拒否するのである。

しかし全体としては、これまでの数十年間に比べて私小説に対してオープンな態度がより広まってきており、それは私小説に関する出版物の点数が増えていることからもわかる。一九七〇年代半ば以降、松原新一（一九七四）、高橋英夫（一九七六）、饗庭孝男（一九七九）、勝山功（一九八〇）、大森澄雄（一九八二）、石阪幹将（一九八五）らによる学問的モノグラフィが出ている。そうした学問的著作以外にも、日本ペンクラブ編・中村光夫選『私小説名作選』（一九八〇）といった通俗的選集があり、日本文学研究資料叢書『私小説』（一九八三）という表題のもとに四人の私小説作家のための資料集なども刊行されている。長らく絶版になっていた山本健吉の『私小説作家論』の再版が出た（一九八三）ことなども、文学研究と文学批評が私小説に対して新たに関心を増大させつつあることの徴候と見てよいであろう。最後になるが、私小説研究が新たな段階に入ったことを示すのが、さきにふれた石阪幹将の著書『私小説の理論――その方法と課題をめぐって』である。石阪のこの著作は、私小説ジャンルの理論に関して、また、従来の研究の分析に関して、重要な寄与をなすものである。

興味深いことに、作家たちの態度にも変化が見られる。なぜなら、ふつうならば私小説作家という連想を呼ばない作家たちでも、作品のどれか一編、あるいはいくつかが私小説と関連づけられることに抵抗しなくなっているからである。大江健三郎の『「雨の木（レイン・ツリー）」を聴く女たち』（一九八二）のことを考えてもいい。それどころか、そうした作家たちは、私小説とはまったく異なる性格の作品であっても、それを「いわば自分自身の私小説」であると形容しようという気持ちを十分に見せている。たとえば遠藤周作は歴史小説『侍』（一九八〇）の栞で、「この小説は僕の私小説みたいなものなんです」（八ページ）と述べている。

私小説という名称を遊びで用いている別の作家たちもいる。野坂昭如はある短編集（一九七九）に『死小説』という題を付けているし、瀬戸内晴美（寂聴）は一九八五年に小説『私小説』を出している。また林真理子は、『私小説』（一九八八）で、このジャンルと戯れている。この林真理子のものは、面白いことに、私小説の典型的な作例ではまったくないのだが、彼女は私小説に対する周知の読書態度を戯れに利用しているのである。読者は、作家の人生について知っている多くの事実を作品に描かれている事実と比較してしまい、どうしてもある種の収斂をさせることになってしまう。著者の林真理子は、ほんのわずかな示唆を意図的に行なうだけでよいのだ。読者の頭のなかで主人公の和美がどうしても林真理子らしく思われてくることは確実だと、著者本人が考えているからである。さらに、この小説『私小説』で和美のベストセラー小説が引用されているが、それがまた自伝的であるし、和美の女友達で、かつ将来のライヴァルである容子が和美の仲介で作家として最初の受賞を経験することになる原稿もまた自伝的なのである。

こうした私小説の約束事との戯れを見ると、たとえば磯田光一（『戦後史の空間』、一九八三）のように私小

説はますますアナクロニズムになっていると非難する人々の見解とは正反対に、私小説がけっして使い古され摩滅した文学ジャンルではないことがわかる。林真理子の小説で何度も述べられているとおり、「書きたがる病」（この言いまわしはすでに芥川龍之介が用いている）[*7]にかかり、告白衝動に駆られる作家はどの世代でもいつも新しく出てくるというだけではない。日本の読者は、おそらくは、こうした自己暴露をいくら読んでも読み飽きることがないようである。いかに批判されようとも、読者の間には潜在的に私小説への関心が高いようなのである。その理由は本書で詳しく考察するが、たとえば胡桃沢耕史の成功は、私小説に対するこうした関心から説明できるであろう。一九八三年に直木賞を受賞した際に、彼は、私小説に転換することによって長らく待ち望んだ成功を勝ち取った旨を述べている。すなわち、「私小説風でないと、賞がもらいにくいと忠告されまして」というのである。[*8]

こうしたことすべてを見ると、なぜ最近になって私小説の評価が高まったのかという問いが出てくる。その理由については臆測することしかできないが、そこに多様な要因がはたらいていることだけは確かである。

ひとつには、一般的に言って、国際舞台における日本の自信が増大した結果として、自分たちの文化と伝統に対して日本の世論が全般的に関心を強めていることがある。この点は、一九七〇年代に出版された「日本論」もしくは「日本人論」といった「自己確認の文章」のブームからも読み取れる。同じ理由から、「典型的に日本的」とされている対象に人々の関心が向き始めた。そして、本書の「序論」が示すように、私小説は日本人の理解から言っても、こうした「典型的に日本的」なものに属している。こうした新たな

関心の結果として、私小説の評価も変化し、それまでの数十年よりも明らかに肯定的になってきたのである。

また、日本の文学批評と文学研究における世代交代が、こうした変化を促す要因となっていることも確かである。その決定的な時点は、一九八三年に小林秀雄が没した時であろう。しかしまた同時に、文学研究者たちの内部では、それまで研究対象としてあまりまじめに取り上げられることの少なかった比較的最近の現象にも強い関心がもたれるようになっている。新しいテーマや問題設定に対してよりオープンになったことは、国文学関係の雑誌の特集などにも表われているが、こうした事情も私小説研究にとって有利にはたらいたことと思われる。また、さきに述べた文学界での現実、すなわち私が別のところで「侮蔑されたジャンルが執拗に生き続けている」と形容した現象も、研究を促す要因となったかもしれない。[*9]

それでは、一九八〇年代における日本以外の国々での私小説研究は、どのような状況にあるのだろうか。面白いことに、国外でも私小説というテーマに対する関心は増大していることがわかる。私見によれば、その理由として二つの傾向が挙げられる。第一は、これまで特別に「日本的」であるとされ、アプローチしにくかったテーマに眼が向き始めたことである。アメリカおよびヨーロッパの若手の日本学者たちは、一九七〇年代以降、従来あまり扱われてこなかった作家の翻訳と批判的研究を進めるようになった。そうした作家とは、志賀直哉、[*10] 梶井基次郎、[*11] 尾崎一雄、[*12] 太宰治、[*13] 島尾敏雄[*14]などである。こうした仕事は、多くの場合、翻訳に批判的注釈と解釈のための文章を付している。研究者たちは、難解で手が出しにくいこうした素材を分析、解明することに特別の魅力を感じているように見える。こうした方向を典型的に示す例

が、フィリス・ライオンズの太宰研究である。彼女は、太宰治の〈生活圏〉なるものを、「彼が作り出した文学的人物像」をつうじて研究しようとする。彼女にとって太宰は「祖型的に日本的」である。この仕事の成果は「エスノ・サイコロジー」的分析にある。つまり彼女は、太宰という人物が、彼の周囲や、彼が抱える独自の問題と関わりあってゆくさまが、一連の文学作品のなかでどのように描かれているかを欧米の読者に明らかにすることをつうじて、日本人であるということは、どのような気持ちを伴うものであるかを示している。[*15]

日本文学研究における第二の重要な傾向は、とりわけアメリカにおいてであるが、ツヴェッタン・トドロフやジェラール・ジュネットらの文学理論に倣った、ナラトロジーの考え方を応用したものである。こうしたアプローチはまず、平安時代の言語テクストに採用されたが、やがて、近代の物語文学にも用いられた。ナラエ・G・モチヅキ（一九八六）によれば、約四十の現代文学テクストをサンプル調査してみたところ、語りの視点は、大半の場合、話者もしくは語り手の視点と一致していたという。その理由は、日本語固有の言語上の特性のゆえに、話者もしくは語り手のない文章は日本語では不可能なところにあるとされている。彼女の見解によれば、こうした言語的性格のゆえに、現代の物語の散文は、その多くの場合に、主観性がきわめて発達することになる。

バーバラ・ミト・リードの一九八五年および一九八八年の仕事は、似たようなやり方ではあるが、もっと文学研究の線にそっている。一九八八年の著作で彼女は、近松秋江の作品を分析して、私小説に典型的に見られる特性がこの作家の語りの構造に由来することを、説得力をもって示している。また、一九八二

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

年、スティーヴン・ウェクセルブラットは、梶井基次郎の六つの短編を翻訳することで、リードと同じ方向の考察を提示している。彼の翻訳分析は、私小説固有の語りの戦略のいくつかをあきらかにしているからである。

こうした研究の結果および新たな関心は、エドワード・ファウラーの『告白のレトリック』（一九八八）という、一九二〇年代の私小説を対象にしたモノグラフィに集約される。この本は、とりわけナラトロジーの側面を重視し、私小説と小説全般の近さを強調している。また、他方でこの本は、私小説というジャンルの条件を述べるとともに、近松秋江、志賀直哉、葛西善蔵という三人の重要な例を明確な分析によって紹介し、文学史への貢献をしている。ファウラーは、彼以前の研究者よりも、これまでの業績に依拠することが可能であったため、その点で、彼の著書は、この間に日本でも欧米でも私小説に対する関心が高まってきた現状をよく反映している。[*16]

だが、本書の冒頭に、研究の現況についてなぜこれほど広範囲な付説をほどこす必要があるのだろうか。それは、現在から振り返って見れば、本書は、今述べた研究史の初期の段階に位置することに気づくからである。本書は、その意図からすれば、扱われている文学史上の時期に関しても、また、対象を扱うさまざまな側面に関しても、私小説とのできるかぎり包括的な対決を提示しようとするものであった。幸いなことに、すべての研究が後の研究によって止揚されるわけではない。その意味で、この最初の一歩が、いくつかの有用な考察や認識を含んでいることを願うものである。

本書の原著を読んで、*The Journal of Japanese Studies* 誌に詳細な英文書評[*17]を執筆してくださったの

は、加藤周一氏である。また、拙著の邦訳を出すよう平凡社に提案してくださったのも同氏である。氏には心より感謝を申し述べたい。

しかし、こうした翻訳計画というものも、シジュフォスの労働のような仕事を引き受けてくださる有能な訳者を得るという幸運がなければ、実現不可能である。この第二の幸運は、三島憲一氏が与えてくださった。三島氏は、山本尤、鈴木直、相澤啓一の各氏と訳者チームを組織してくださった。学問的著作の、しっかりした、また、読みやすい翻訳というものがいかにまれであるかを知っている人々には、私の喜びと感謝の念がいかばかりであるかを、想像していただけるであろう。こうした友情の申し出に対していつの日かお返しができるであろうかと思うと、心もとないものがある。

最後に、日本人ではない者がきわめて日本的な文学ジャンルについて書いた著作を翻訳出版するというリスクをあえて引き受けてくださった平凡社に感謝する。この感謝の念は、翻訳計画を楽観的かつ実行力をもって、忍耐強く推進してくださった平凡社編集部の田邊道彦氏に対して表したい。

イルメラ・日地谷＝キルシュネライト

注記

一、出典の選択について

引用は可能なかぎり原典から行なった。その場合、出典は、著者名のあとに出版年を添えて表示した。それ以外の場合には全集から引用し、また全集が存在しないか、または入手できなかった場合には、その他の選集類を利用した。

一、掲載データについて

作家や、一部の日本の批評家については、初出の際に生没年を掲げた。文学作品名のあとに付された年度は、原則として初公刊の年度を示し、したがって、新聞小説などでは、単行本の発行以前の年度が付されている。より詳しい分析のために「細かな日付」が必要とされる場合には、発行月も記した。

目次

日本語版への序文　3
注記
序論　問題設定への導入　25
第I部　コンテクストと成立条件
第一章　時代史および精神史的コンテクスト　42
第二章　日本の自然主義　52
第三章　田山花袋——ある自然主義作家のパラダイム　67
第三章第一節　「影響」の問題　73
第三章第二節　西から東への親和力　76
第三章第三節　「誤解」　77
第三章第四節　復古としての刷新　81

第四章　『蒲団』　83
第四章第一節　自伝的要素　86
第四章第二節　ハウプトマンの影響　88
第四章第三節　作品の系譜　94
第四章第四節　同時代文学の「骨格」　96
第五章　「理論面」での『蒲団』の受容——書評とエッセイ　101
第六章　「実作面」での『蒲団』の受容——模倣とパロディ　110

第Ⅱ部　私小説研究史

第一章　研究状況の一般的考察　122
第二章　私小説研究の「古典的代表著作」　129
第二章第一節　小林秀雄『私小説論』　129

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com